

## 令和2年6月の解説（府県天気予報）

### 【6月の天候状況】

上旬は、北日本・東日本と西日本日本海側では、高気圧に覆われて晴れる日が多くありました。このため、降水量は東日本太平洋側と西日本日本海側でかなり少なく、日照時間は、北日本太平洋側と東日本日本海側でかなり多くなりました。北日本太平洋側の日照時間は平年比154%で、1961年の統計開始以来6月上旬として1978年と並び最も多くなりました。その一方で、低気圧や前線が沖縄・奄美から西日本の南岸に停滞したため、沖縄・奄美と九州南部では活発な梅雨前線の影響を受けた時期があり、8日には沖縄県で浸水害が発生するなど、大雨となった所がありました。このため、沖縄・奄美の降水量はかなり多く、降水量平年比は277%で1961年の統計開始以来6月上旬として1位の多雨となりました。気温は、日本の南海上で太平洋高気圧が強くと、中国東北区からオホーツク海南部付近を低気圧が通過しやすかったため、日本付近には暖かい空気が入りやすかったことや、北日本・東日本・西日本では晴れて強い日射の影響を受けた日もあり、全国的にかなり高くなりました。特に、東日本の平均気温は平年差+2.8℃で、1961年の統計開始以来6月上旬として最も高くなりました。なお、10日ごろには中国地方、近畿地方、東海地方で梅雨入りしたとみられます(速報値)。

中旬は、沖縄・奄美では太平洋高気圧に覆われて晴れる日が多くありました。一方、梅雨前線は本州付近に停滞しやすく、また、沿海州から北海道付近を低気圧が通過しやすかったため、北日本・東日本・西日本では曇りや雨の日が多く、大雨となった所もありました。このため、降水量は、沖縄・奄美ではかなり少なくなりましたが、東日本・西日本ではかなり多く、西日本日本海側では平年比329%で1961年の統計開始以来6月中旬として1位の多雨となりました。また、日照時間は西日本太平洋側でかなり少なくなりましたが、沖縄・奄美ではかなり多くなりました。太平洋高気圧の縁を回って暖かい空気が入りやすかったことから、気温は全国的にかなり高く、特に北日本では期間のはじめに太平洋側を中心に晴れて強い日射の影響も受けたこともあって、平均気温は平年差+2.5℃で1961年の統計開始以来6月中旬として2010年などと並び最も高くなりました。なお、12日ごろには沖縄地方で梅雨明けしたとみられる(速報値)ほか、11日ごろには九州北部地方、関東甲信地方、北陸地方、東北南部で、14日ごろには東北北部で梅雨入りしたとみられます(速報値)。

下旬は、太平洋高気圧が日本の南海上で西へ張り出し、オホーツク海でも高気圧が明瞭でした。梅雨前線は期間のはじめは奄美地方付近に、その後は本州南岸付近に停滞しやすくなっていました。太平洋高気圧の縁を回って湿った空気が入り、梅雨前線の活動が活発となって25日には長崎県で土砂災害が発生するなど、大雨となった所もありました。また、北日本では北からの湿った空気や低気圧の影響を受けて曇りや雨の日が多くありました。このため、降水量は北日本と東日本太平洋側、沖縄・奄美で多くなりました。日照時間は、北日本と沖縄・奄美でかなり少なくなりました。また、北日本太平洋側の日照時間は、平年比43%で1961年の統計開始以来6月下旬として1位の寡照となりました。一方、東日本・西日本日本海側では前線や湿った空気の影響を受けにくく晴れた時期があったため、降水量は東日本日本海側で少なく、日照時間は東日本・西日本日本海側かなり多くなりました。気温は、太平洋高気圧の縁を回って暖かい空気の入りやすかった東日本・西日本と沖縄・奄美では高くなりましたが、北からの冷たい空気の影響を受けた日もあった北日本では平年並となりました。

### 【6月の検証結果】

17時発表の天気予報による「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報は例年値<sup>(注)</sup>より6ポイント高い88%で、明後日予報は例年値よりも8ポイント高い85%でした。地方別の適中率では、明日予報は、北海道地方を除く各地方で例年値を上回りました。また、明後日予報は、北海道地方を除く各地方で例年値を上回りました。

同じく17時発表の天気予報による明日の最高気温の予報誤差は、全国平均で例年値より0.2℃小さい1.7℃で、九州南部地方を除く各地方で例年値よりも小さくなりました。また、最低気温の予報誤差は、全国平均で例年値より0.2℃小さい1.0℃で、沖縄地方を除く各地方で例年値よりも小さくなりました。

(注) 例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

### 【8月の天気予報の利用にあたって】

8月は、台風が日本に接近・上陸することが多く、1981年から2010年までの30年間の平均では、接近数は3.4個、上陸数は0.9個で、それぞれ年間を通して最も多くなっています。台風にともなう暴風、大雨、高潮などにより、しばしば大きな災害をもたらされます。台風が日本付近に接近・上陸すると予想されている場合には、最新の台風情報や気象情報などに十分注意してください。